

妻の入院

昭和三十六年頃、妻が大病院に入院した事があった。長男が小学二年、二男が幼稚園、年長組の頃だった。

二男はバスで東仙台のナザレト幼稚園に通っていたが、年長組になってからは、朝バスに乗せてやれば、帰りは一人で間違わずにニコニコ元氣よく帰ってくる。少しでも体の不調があれば、お得意様の小野寺外科医院に寄って見て貰い、手が掛からなくなった。

小野寺先生は我が家の家庭医、二男が高校時、盲腸の手術をして貰った事もあるし、風邪を引いたと言っては薬を貰い、ビールを飲み過ぎた時に、私が先生に電話をかけ往診を頼んだら、「寝ていれば良くなる」と言われ、私は「見ていなければテレビ直しに行かない」と駄々こね往診して貰った事が二度ある。本当にお世話になった。

診察代や薬代は月末勘定で毎月妻が支払いに行った。

妻の病氣は先生の専門外、大病院に約十日間入院した。子供達と夕食を済ませ店を閉め、二人を寝かし付け、病院に行く。大病院は、結婚した頃妻が生家から遠路通い、治療を受け全快した病院だから、知っていた先生が居たようだ。

病室に着く時間が毎日決まっていて、待ち侘びている。約一時間よもやま話をして帰るのが日課だった。

四・五日過ぎた頃、私が仕事の都合で行けなかった夜があった。翌日病室に行ったら、「昨夜熱を出し先生やら看護婦さんにお世話になった」と私の顔を見て安心した様な口端だった。

そして、「昨夜お父さんが来ないものだから、家の事や、子供の事を考え過ぎ、眠れなかつたら熱が出て来た」と話をしてくれた。

次の日子供達を連れて行き、母親と面会させた。嬉しかったのだろう、病氣すると気が弱くなる、チョットの事で涙を流す。子供達も久しぶりに母親に会えて、甘えられた様だ。

十日間の入院中、私が病院に行かなかつたのはその一晚だけ、全快して退院してきた。若き時代の忘れられない一駒だ。